

ワカサギ・シラウオの調査

(宍道湖・中海水産資源維持再生事業)

石田健次・三浦常廣

1. 研究目的

宍道湖・中海におけるワカサギ、シラウオの資源・生態と、それを対象とする漁業の実態を明らかにし、これら資源の維持・増大を図る。

2. 研究方法

(1) 産卵状況調査

平成19年2月に斐伊川河口から約2km上流の灘橋までの間に設けた計33箇所調査船わかさぎ丸(0.8トン)を用い、エクマンバージ採泥器(0.02㎡)で採泥した。試料は10%ホルマリンで固定し、実験室でローズベンガルで染色を行い、付着器が膜状のものをワカサギ卵、糸状をシラウオ卵とした。

(2) 稚魚分布調査

平成18年6月に宍道湖および新建川・船川の計18箇所調査船わかさぎ丸を用い、桁引網(目合2mm、全長26m、桁長4.5m)により各箇所30m曳網した。なお、今年度はこれまでの引き網を桁引網に変更して行った。

(3) 刺網漁業実態調査

平成11～17年度に行った標本船調査による刺網の操業位置や漁獲資料を整理し、両種の移動・分布状況を検討した。

(4) ワカサギの溜池移植放流後追跡調査

平成13年5月に松江市秋鹿町の井神奥溜池(約110m×約25m×深さ約6m)に1,500尾(宍道湖産ワカサギ人工種苗、平均全長30mm)を移植放流後、毎年12月に数kg～数十kgのワカサギの漁獲があり、実態を調べた。

3. 研究結果

(1) 産卵の状況(巻末の資料参照)

採泥箇所数33箇所のうち、卵が採集されたのはワカサギ5箇所(平成14～17年度平均17箇所)、シラウオ3箇所(13箇所)、これまでと比べて

最も少ない状況であった。また、卵の採集個数も1㎡当たりワカサギ平均66個(14～17年度平均2,005個)、シラウオ35個(530個)、これまで最も少ない結果であった。

(2) 稚魚の分布状況(巻末の資料参照)

今年度の1曳網当たりのワカサギ稚魚平均入網尾数は4尾(14～17年度144～279尾)で、これまでと比べて大きく減少した。一方、シラウオは18,810尾(933～2,183尾)と、これまでと比べて格段に多い結果であった。漁具変更に伴い、従来の引網に合わせて数値補正したが、補正方法は今後検討を要する。

(3) 刺網漁業の実態

ワカサギの産卵期には刺網漁場が斐伊川河口付近に移動・集中する傾向があり、産卵直前の親魚が刺網により多獲されるものと推察された。一方、シラウオは漁場が集中する傾向もなく、産卵は各所で行われるものと思われた。

(4) ワカサギの溜池移植放流後の漁獲実態

移植放流後は無給餌で再生産が行われており、今回は約3,000尾(14kg)のワカサギが取上げられ、親魚用に1,000尾程度(目視)が取残された。魚体は満1歳魚が大半を占め、満2歳魚と思われる個体も少量観察された。また、生殖腺が発達中で、翌年2月に湖底の砂利に産卵が認められた。

4. 研究成果

得られた結果は、宍道湖漁協のます網組合の役員会で利用され、総会で発表した。

宍道湖・中海水産資源維持再生事業検討会で発表した。